
才能人の応援歌

K A R O

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

才能人の応援歌

【Nコード】

N3284F

【作者名】

KARO

【あらすじ】

様々な才能を持つ赤い髪と瞳の少年^{ひな}緋那高校一年竜緋朝音AB型
今日も彼は待つことにした自分のために応援歌が歌われるのを。

第一話 プロローグ（前書き）

前回衝動だけで書いた小説を削除してしまったので（ネタが思い浮かばず）せめて今回は完結させたいと思っているKAROです、これからも何とぞ御愛読をよろしくお願いします。

第一話 プロローグ

いきなりだがこの世界は不公平だ。

例えば【才能】とか

これは世界中の人々全てに与えられている物ではない。

少しは誰しも持っていたり努力で補ったりしているかも知れないが自分で望んで手にする事は不可能だ…

それこそ肉体的な物や世に言う天賦の才なんかは本当に望んでも不可能だ

もしもそんな物を努力で手に入れられたなら誰も挫折なんざ味わう事はない。

努力や願う事ではどうにもならない絶対的な物。

始めに言ったが世界は……もしくは神様とかは不公平で気紛れだと

思う

そして才能の無い者が才能の有る人間に憧れや好感を抱いたり
逆に妬みや嫉妬に身を焦がす。

しかしその才能って奴があるからと言ってこの世界全てが上手く回
る訳じゃない…

その才能が桁外れならそれが当たり前になり応援や感心もなくなっ
ていく。

そのくせその期待が外れれば勝手に落胆する。

悩みもあれば涙だって流す。

誰かの背中にもたれかかったり慰められたい時もある。

勉強やスポーツは人並み外れ…

歌や楽器なんかも人並み以上で…

肌は白くて女によく間違われて…

人とは違う赤い髪と瞳を持つ

俺はそんな人間だ。

皆は俺にあだ名をつけた

【才能人】と

アホらしいそのあだ名を聞きながら

今日も今日を生きるんだ。

応援歌すら歌われないこの場所で…

第二話 竜緋 朝音の日常（前書き）

誤字脱字が多いかも知れませんが見てやってください、とりあえず1ヶ月以内に一話を目標に書きたいです。

第二話 竜緋 朝音の日常

いきなりだが俺は普通じゃない…

小学生位の時から自覚していた。

始めは他とは違う目や髪の色で異端視された…

その時はただ周りが近づかないだけだったんだ…

しかし授業でバスケットをした時高校生顔負けの試合をしたり
学力テストで全部満点をとったあたりからそれも変わった…

7

いつの間にか

「天才」だの

「神童」だのと呼ばれるようになっていた

普通ならそこで調子に乗ったり偉そうにふんぞり返るんだろっけど…

俺はそこも普通じゃなかったんだ…

……

「パス回せ！、パス」

「ソッコー！」

野外に作られた学校のバスケットコート脇を抜けながら一枚の紙を眺め少年は悩んでいた。

「…またやってしまった…」

かなり落ち込んでいるのかとにかく肩を落としてため息をついている

「ありえねえだろ…」

そんな少年に…

「あ！、ミスった」

手先が狂ったのかバスケットボールが少年目掛けて飛んできた。

「あー!!」

部活をしていた生徒が叫ぶ

それもそのはず練習よ用のボールを使っていたためその重さはシャシにならないのだ…

それがもし頭にでも当たれば…

「あ、危ない!!」

生徒は真っ青になって叫び声を上げた。

「たく…なんでいつもこんな…」

しかし聞こえていないのかまったく少年は避ける素振りを見せない

もうダメだと部員達は目を硬く瞑ったり生々しい音が耳に

……

【パシッ…】

……

「……………?」

届く筈なのに聞こえたのはまったく想像していなかった音…

「はぁ……………」

「」「つゝ…!!」「」

今度は部員全員が驚愕の表情を見せた。

それもそのはず…

少年の片手には…

「危ないだろ、気いつけるよ〜」

バスケットボールが受け止められていた

「ぶ、部長…、あ、あれ練習用の重量ボールじゃ…」

「飛んで来たのを片手で…、受け止めただけでも脱臼ものなのに…」

そんな部員達の気も知らず少年はボールを二三回ついで片手の手のひらに乗せる

そして…

【ヒュッ…】

「な…!!」

【パスッ】

少年の投げたボールは放物線を描いてゴールした

「んじゃ、俺は用事あるから次からは気をつけてく……………」

「「是非我ら緋那高バスケ部に！！」」

……………

なんとか勧誘を断って少年…竜緋 朝音は自分の通う緋那校近くの公園ベンチに座り一息ついていた。

自分の成績表を見つめながら。

「……………はあ」

「ため息ばかり吐いてたら幸せが逃げるぜ朝音」

そんな朝音の前から陽気な声が聞こえてきた…

「イチカ（吉華）…お前の無駄にけたたましい声を聞くともっとため息が吐きたくなるんだが…」

【彼の名前は大澤 吉華】

運動神経抜群で漫画家を目指している金髪の親友（悪友）だ
なぜか小学校入学式の時

「俺らオソロじゃ〜ん！」とか抜かして人の髪触ってきたので張り
倒したらそれからなつかれた
正直意味不明な性格で俺に引っ付いてくる、まああんまり嫌いって
訳じゃないからいいけど…】

そんなイチカに頭を抱えて朝音は再びため息を吐く

「な！、それが親友に対する言葉か！」

「親友？、悪友だろ…よくても腐れ縁もしくはただの面白み皆無な
ほんと〜〜に普通に凡人の幼なじみ？」

「泣くぞ！」

「勝手に泣け…」

「くしょおおおー！！」

あ…、マジで泣いた…

てかいい高校生が泣くなよみっともない

(泣けと言った本人)

つとそんな事を考えて泣いてるイチカを眺めていると

「国語100 数学96 歴史98 科学100 英語99 音楽
100…」

「あんだ本当に人間か？」

「!!!」

後ろから透き通った声と呆れたような声が響いた。

「おい！、オマエら、いきなり背後から現れるなってあれだけ！」

【ガシッ】

「誰がオマエらだ？、ん？」

【ミシミシ】

のせられた肩から異音が鳴り出した

「わ、悪かったツキラ（月羅）謝る、謝るから離して…折れる…」

【彼女は夜神 月羅】

名字は（よるがみ）だ、こいつも幼なじみの一人で回りの男子いわく美人…、だそうだが…

黒髪でショートカット…あと若干乱暴（本人に言ったら死）だ

そして何より人知を越えた馬鹿力の持ち主

しかも自覚がないからなおさら質が悪い…

かといってムキムキマツチョってわけでもなくどちらかと言えば小さくて細いし…、一体どこからあの馬鹿力が出ているのか…謎だ…】

「まったまた〜、大袈裟な事言つてえ〜、私のいたいけな弱い女の子で折れるわけないでしょ」

「か弱い女に折られるほどもろい骨じゃないがマウンテンゴリラに握られて折れないほど丈夫でもないぞ…」

【ミシメキメキ】

「 ¥ ¯ * \$ ¥ # ! ! 」

「誰がマウンテンゴリラだ？、ん？」

「カヨワイオヲナノコデス…」

「よろしい…」

そんな風にツキラとじゃれて（一方的イジメ）いると…

「まったくいつまで遊んでるの？」

もう一人の方が話しかけてきた。

【こいつの名前は松里 唯 名字は（まつり）だ…
同じく幼なじみでスポーツ勉強ともに俺とどっこいで切磋琢磨しあ
える存在だ…

ちなみにかなりの超美人（クラス男子いわく）

ピアノ等の楽器も上手く高一ながら副生徒会長でもある…

肩より少し長いストレートの黒髪を持ち

新雪みたいに白い肌はまるで大和撫子のよう…（クラスのバカ共（
男子）からの情報）

「違う唯、遊んでるんじゃないイジメられてんだ…」

「イジメて犯ろうか」

「まで、その漢字は【犯】でなくて【殺】だろ！」

「こっちのがあなたには効くでしょ」

「よおるううなあああ…！」

「少しは女の子に慣れないと」

「むううりい…！」

はい…、実は朝音は女の子が苦手です…

理由はまた後程…

つとまあこんな感じでいつものコントを続けていると

『ニヤア〜』

ノリノリの猫の鳴き声が公園に鳴り響いた

「あ、もうお昼ね、入学式思った以上に速く終わったからわからないかったわ…」

「相変わらずこの時計の音は間が抜けるなあ」

「まあ…、それが好きなのがいるわけだしいいんじゃないの？」

「猫好きにも程はあるだろうよ…」

朝音は無類の猫好きで毎回昼間には学校を抜け出し学校近くの公園

【通称猫公】でほのぼのしている

さてなぜここが猫公と呼ばれるかとゆつと…

「なに、お昼！」

「ちょー！、急に止まっオブー！！」（止まった朝音に激突）

朝音はカバンをあさくつてあるものを取り出す

「餌の時間…！」

まあこいつのせいであ…

『ニャア〜』

『ニャアア〜』

気がつけば周りは猫だらけ…

「朝音？、いい加減カバンにキャットフードとマタタビ粉を常備するの止めない？」

「無理！！」

まあ無類の猫好きなわけで…

「はあ、まったく…」

唯は額に手を当てため息をつく

「そう、キバんなよ、それに…」

そんな唯の肩に手をおいて壱華が笑いかける

「朝音ここまで笑うようになったんだしさ」

そんな壱華の言葉に唯は朝音を見つめて微笑んだ

「そつね…」

集まった猫にキャットフードを上げる朝音

その朝音を止めようとする月羅

そんな二人を遠くから眺める壱華と唯

こんな感じで才能人
竜緋 朝音の日常は続くのであった

第二話 竜絆 朝音の日常（後書き）

疑問や問題点がありましたら是非気軽に感想ください

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3284f/>

才能人の応援歌

2010年10月9日21時09分発行